真夏の桜

いきょうちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
真夏の桜

【Ｎコード】
Ｎ１９９６Ｚ

【作者名】
いきょうちゃん

【あらすじ】
高校一年の夏休み、５年ぶりに祖母の田舎へと遊びに行く事にした村瀬裕（むらせゆたか）。
蝉の声が降り注ぐ自然豊かな小さな村で、一人の少女と出会う。
その少女と友達になった裕は、少女にあるお願いをされることになる。
それはーーー『昔埋めた友達の手紙を見つけて欲しい』との願い。

その少女の記憶を頼りに、裕は手紙を探す手伝いをする一夏の体験。

夏休み

「いい？　おばあちゃんのとこに行ったらちゃんとお手伝いするのよ！」
昨日から事あるごとに母から言われ続けている言葉を背に受け、村瀬裕は玄関を後にした。

裕は高校一年の夏休みを利用して、久しく会っていない祖母の田舎へと遊びに行く事にした。
祖母の田舎へは自宅から電車とバスを乗り継ぎ2時間ほど掛かる。
「ばぁちゃん元気かなー」
5年ぶりの再開に裕の口からは自然と言葉が漏れていた。

電車に乗ること50分。最寄りの駅へと到着した。
そしてすぐにバス停へと向いバスへと乗り込んだ。
「ふぅー。このバス逃したら次は半日後だもんな。それにしても後1時間か……」
バスが進むに連れ建物がなくなり、田畑や木々の数が増えてくる。
そんな景色を見つめ、どこか懐かしさを感じながら、裕はバスの心地よい揺りかごに揺られ眠りについた。

遠い日の思い出

「一番後ろのお兄さん！　着いたよ！」

裕はバスの運転手の声で目が覚めた。

「あっ！　すいません！」

急いで現在地を確認すると、祖母の家最寄のバス停の大桜村（おおさくらむら）だった。いつの間にか寝てしまった裕は慌てて荷物を持ち、足早に運賃箱の前へと駆け寄り財布から小銭を探す。

「あっ！」

バス内に小銭の散らばる音が響き渡る。

急いで小銭を拾い上げようとするもシートの下へと入り込み、なかなか取り出せず慌てふためく裕をみて運転手は大声で笑い出した。

そんな声を頭上から浴び、裕はすこしムッとした。

「いやぁ、裕は相変わらずあわてんぼうだな」

名前を呼ばれ、驚きながら顔をあげると、笑い声の主は裕の叔父の光治（みつはる）だった。

「あぁー！　光治おじさん！？」

裕は久々かつ思いもよらぬ再開に面食らった様子で話しかける。

「だいたい行き先も言ってないのに、起こされたら普通おかしいと

思うはずだけどな！　いいから金拾ってばあちゃんの所に早く行ってきな！　ばあちゃん待ってるぜ。　一週間前からゆうちゃんがくる、ゆうちゃんがくるって耳にタコどころか、イカができちまったよ」

「おじさんつまんねぇ」

「がははははっ！　このセンスが分からないとはまだまだ子供だな」

「おじさんが古いんだよ」

裕は小銭を全て拾い上げ運賃箱へと料金を放り込んだ。

「じゃあな！　夜に顔出すから楽しみに待ってろよ！」

叔父の言葉に手をヒラヒラと翻(ひるがえ)しバスを後にする。

ドアが閉まり、クラションを一瞬鳴らしバスは走り出した。

バス停の辺りには田んぼや畑が広がっている。　そこを抜けると村があり、その中に祖母の家もある。

裕はしばらく歩くと、田畑に囲まれた一軒屋の前で足を止める。

「あれ、こんなところに家なんかあったけ？　確かここは大きな石があって、畑仕事の休憩場だったような・・・」

裕の古い記憶には、まだ幼稚園に通っていた位の時に、祖母や農家のじいちゃんばあちゃん達と大きな石の前でおにぎりを食べた風景がぼんやりと蘇る。

「まぁ、もう１０年以上も来てない訳だし、いくら田舎でも新しい

家の一軒や二件位増えてもおかしくないか」
そう自己解決し、村へと歩を進める———

「あっつー」

無意識に言葉が漏れる。
今日の天気は快晴。気温も３０度を超える真夏日、そして雲一つない空に悠然とたたずむ太陽からはジリジリと太陽光が降り注ぎ、額には玉のような汗が溢れている。
そんな中を歩き続け、ようやく祖母の家へと到着した。

ドアに手をかけた瞬間ドアは勝手に開き、祖母が満面の笑みで出迎えてくれた。

「ゆうくんよく来たね！　熱かっただろうに、早くうちに入んなさい」

「ビックリしたぁ」

「まだかまだかと玄関で待っていたんだよ」

家に入ると懐かしい祖母の家の香りがした。お線香のような、畳の香りのような……なぜか落ち着く匂い。その懐かしの香りに、裕は子供の頃の記憶を思い出す。

（よくおんぶしてもらってたなぁ……）

祖母の背中を見るととても小さく感じた。

居間へ腰を下ろすと、祖母は冷蔵庫から麦茶と大きな大福を持ってきてくれた。

「疲れたろうに、甘いもん食べると疲れもとれるからね」

「少し見ないうちに大きくなってまぁ」

「お父さんとお母さんは元気？　電話では元気そうだけど、体壊してないかい？」

「学校は楽しいかい？　お友達はできたかい？」

祖母は堰（せき）を切ったように話しかける。

「ばあちゃん、そんなに一気に言われても俺の頭はついてけないよ」

「そんなことないよ、ゆうくんは人一倍おりこうさんだからねぇ」

「ばあちゃん、俺も子供じゃないんだから」

「ばあちゃんからしたら子供なの！　お父さんだってまだまだ子供だね」

そんな他愛もない話を続けていると、鳩時計が１５時を知らせる。

「あら、もうこんな時間かね？　今日のお夕飯の材料を買ってこようかねぇ。　ゆうくんはどうする？」

「んー……ちょっと散歩でもしてくるよ」

「そうかい、じゃぁ気をつけていくんだよ」
祖母はそう言い終えると買い物カゴを手に持ち家を出て行った。
裕もとりあえず家を出たがどこに行こうか特にあてもなく、なんとなしに河原のほうへと歩き出した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1996z/

真夏の桜

2011年12月11日05時46分発行